



アクティブ・ラーニング その1 この考えが生まれた背景

◇ 新しい教育課程の改訂のキーワードとして「アクティブ・ラーニング」という言葉が出されるやいなや、あちこちでこの言葉を聞くようになりました（日本人は横文字に弱い）。一時期、「アクティブ・ラーニングこそが新しい研修のテーマである」くらいに盛んだった声も、最近はかなり下火になってきました。しかし、アクティブ・ラーニングが新教育課程の重要キーワードのひとつであることは間違いありません。そこで、私なりに調べたことをもとに、そのイメージについてまとめてみようと思います。まずは、この考えが生まれた背景からです。

◇ この「アクティブ・ラーニング」という用語が使われるようになったのは、**中央教育審議会（2012年8月28日）の報告書**に次のように書かれてからです（たぶん）。

「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである」（『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』）

同答申に、**その定義**も次のように書かれています。

「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である」

中央教育審議会 「用語集」より

◇ このアクティブ・ラーニングが言われるようになる前、その布石となる考え方があちこちで出されています。

【キーコンピテンシー（OECD：経済開発協力機構）】

- ① 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
- ② 多様な社会グループにおける人間関係形成能力
- ③ 自律的に行動する能力

【21世紀型スキル（ATC21s プロジェクト）】

- 思考の方法：創造性とイノベーション・批判的思考、問題解決、意志決定・学習能力、メタ認知
- 仕事の方法：コミュニケーション・コラボレーション（チームワーク）

- 仕事の道具：情報リテラシー・情報コミュニケーション技術（ICT）
- 生活の方法：地域や国際社会の市民性・人生とキャリア設計・個人と社会における責任

【人間力（内閣府）】

- ① 基礎学力，論理的思考力，創造力などの知的能力的要素
- ② コミュニケーションスキル，リーダーシップなどの社会・対人関係的要素
- ③ 意欲，忍耐力，自分らしい生き方や成功を追究する力などの自己制御的要素

【社会人基礎力（経済産業省）】

- ① 前に踏み出す力（アクション）：主体性・働きかけ力・実行力
- ② 考え抜く力（シンキング）：課題発見力・計画力・創造力
- ③ チームで働く力（チームワーク）：発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力

これらから言えるのは，どの考えも受け身的な学習からの脱却をねらっているということでしょう。

- ◇ このような背景から出てきたアクティブ・ラーニングですが，読まれたら分かるように，最初は，大学教育の改革として出されたのです。しかし，いつの間にか小学校教育にも，この概念が適用されるようになってきました。その背景には，社会の有り様が大きく変わってきているにもかかわらず，学校現場では遅々として教育改革が進んでいかないことにあるようです。大きく様変わりした「社会の有り様」で，学校教育に直接関係するのが，「求められる人材像」です。例えば，前文科省教科調査官の田村氏は著書の中で次のように書いています。

*昔は，キャッチアップの時代で，大量の知識を暗記し，間違えのないように再生することが求められた。一方的に価値を与えられ，その価値を伝承していくことがよしとされた。このような目的をもったところでは，一斉画一的な授業が絶大な力を発揮した。しかし，今はイノベーション（技術革新）の時代となり，私たちの手元に正確で大量の情報が瞬時に届くようになった。一つ一つの事実に知識を暗記し再生するよりも，そうした知識を実際の生活の場面や問題解決の場面において，活用できる汎用的能力こそが求められるようになった。また，自ら新しい知を創造することが求められるようになった。これからは，そうした人材が求められることになる。

「授業を磨く（東洋館出版社）」

これは，**OECD（経済協力開発機構）**が職業に求められるスキルの推移について示したのものにも表れています。

未来社会では，反復系の手作業や認識を伴う仕事は減少し，非反復系で分析を伴うもの，非反復系で双方向を必要とするものが増加するであろう。つまり，じっくり考えること，どれが適切かを判断して決断するなどの思考を伴うもの，他者と話し合ったり情報交換したりして新しいアイデアを生み出し創造すること，折り合いをつけ一致点を探ることなどの能力が期待される。

ここでも，単に知識を暗記し再生すればいいのではなく，論理的に考えたり他者に分かりやすく表現したりする実社会で活用できる力，いわゆる汎用的能力が求められるようになることと書かれています。この汎用的能力を身に付けさせるものとして重要な位置づけとなると注目されたのが「アクティブ・ラーニング」じゃないかと推測できるのです。

文責：スギタ